

きらさく（きらめく花の咲く話）

きらさく
（きらめく花の咲く話）

作・中野浩作

きらさく（きらめく花の咲く話）

登場人物

アイリス

マリ

旅人

語り

・
・
・

花の街の泥棒

花を咲かせる聖女

語り

「旅人がおりました。

旅人はいくつもの街を訪れました。

豊かな街、貧しい街、平和な街、争いの絶えない街。

この世界にはいくつもの街があり一つ一つにそれぞれの幸せの形がありました。

旅人は街を訪れ、人々と話し、こう尋ねます」

旅人

「あなたの幸せは何だい？」

語り

「そんな問いかけに、ある者は、お金があることだ、と言い、またある者は、家族と一緒にいることだと言ひ、ある者は、毎日笑顔でいることだと答えました。

旅人は、幸せを教えてくれた人に花をプレゼントしました」

旅人

「この花は幸せの約束。

あなたの幸せがずっと続くという願いがこもっているんだ」

語り

「そう言い残し、旅人は去っていきます。

旅人が何者で、どこに向かつていて、何をしたいのかは誰も知りません。

ただ、その胸元には一輪の美しい花が咲いておりました。

このお話は、昔の話。

この旅人の昔の話。

なぜ彼女はなぜ旅をしているのか。その、きっかけの物語。

きらめく花の咲く話。

短いお時間ではございますが、どうぞお楽しみくださいませ」

賑やかな音楽。

旅人転じて、アイリスとなる。

アイリス、高台に上り、あたりを見回す。

彼女の前には一つの街。

アイリス「へー、ここがシアワセの花の街か。確かにどこもかしこも花だらけ、それにみんなニコニコ笑ってやがる。へへ、こいつは噂通りのいい街かもしれないな」

語り 「さて、旅人は昔、泥棒でした。その名もアイリス。

どこから来たのかもわからぬ根無し草。街から街へと渡り歩き、そのお眼鏡に叶ったら、なんでもかんでもかっぱらっていつてしまう。よく言えば自由気ままな、悪く言えば、大変自分勝手な悪党でございました」

アイリス「（語りに向かって）おい！ 悪党はないんじゃないか？」

語り 「そう申されましても、世間一般的に、泥棒は悪いことでしょう」

アイリス「そいつは違うね。善いやつから大切なもんを盗み取ったらそれは悪事だろうさ。

けど、このアイリス様は善人から盗みを働いたことなんて一度もないんだぜ。私腹を肥やしたいけ好かない金持ちか、汚い金が好きで悪党から盗み取るんだ」

語り 「それはご立派。では、その悪党から盗んだものは、世のため人の為になるようにお使いになるんでしょうな」

アイリス「はあ？ なんでそんなことしなきゃいけない？」

語り 「いやいや、世間一般的にはあなたのような泥棒は、世のため人の為には悪人から金を盗みだして、お城のてっぺんから金銀財宝をばら撒くのが相場でしょう」

アイリス「いやだよ、勿体ない。私が私の努力で盗み取ったもんを、なんで見ず知らずの連中にほいほいあげなきゃいけないんだ？」

語り 「では、同じではありませんか？ あなたも盗んだモノで自分のお腹を肥やすのでしょう？」

アイリス「おいおい、この見事なプロポジションが見えないのか？ それに根無し草に肥やせる根っこなんかあるもんか、大抵、次の街への路銀ですっからかんだよ」

語り 「・・・わかりませんね」

アイリス「何が？」

語り 「人の為に盗んでるんでもなく、とは言え、金銀財宝が欲しいわけでもないと来た。あなた、何を好き好んで泥棒なんかしているんです？」

アイリス「（にやりと笑って）楽しいんだよ」

語り 「はあ？」

アイリス「自分の努力、磨いた技で、人様の大切なものを盗み取るのが楽しいんだ。

嚴重な警備をかいぐり、何重もの仕掛けを解除して盗み取る！ 私の手に自分の大切なもんが握られてる時の連中の顔ったら最高だ！ 呆気に取られて、そんなはずはない！ って顔だ！ その顔を見ると、心から幸せだって感じるんだよ、私は！」

語り 「捕まったことはないんですか？」

アイリス 「そりゃあるさ。でもな、このアイリス様を閉じ込めておくような場所なんてあるもんか、どんな鍵もババッと開けて、とんずらさ。私の自由を奪うようなことは誰にもできないんだからな」

語り 「それはすごい。どうやらあなたは大変腕のいい泥棒のようですね」

アイリス 「そうそう、私は大変腕のいい泥棒なんだ。だからこの街でどんな仕事ができるのか楽しみで仕方ないのさ」

語り 「しかし、あなたのお眼鏡に叶う獲物はこの街にはないと思いますよ」

アイリス 「はあ？ どういうことだよ」

語り 「街の人たちの顔をご覧になったでしょう。この街に自分の事だけを考えている悪い輩はいないのですよ」

アイリス 「ははっ、そんなことあるわけない。あり得ない。どんな街にもいるんだよ。いっただって私利私欲に目がくらんで、人の幸せ踏みにじってる悪党がさ」

語り 「いいえ、おりません。この街はシアワセの花の街。この街に住む人達は子供から貧乏人まで、みんな生まれた時から幸せで、そのまま死ぬまで幸せに生きるのです。街の住人全員が幸せなら、自分だけ幸せになろうなんて者が現れるわけがないでしょう？」

アイリス 「なんだよそれ、嘘くさいな」

語り 「しかし、事実です。この街には聖女様がいらっしゃる。聖女様がいる限り、この幸せは終わることはないのです」

アイリス 「(突然、手を叩いて) やっぱいるんじゃないか！ 悪党が！」

語り 「いえいえ、聖女様は——」

アイリス 「その聖女様ってのが、この街を仕切ってるんだろ？ ああ、ああ、皆まで言うな、大体わかったから。その聖女様が街の幸せの裏で悪だくみをしてるに決まってる！ よし、そうと決まれば——！」

語り 「ちょっと、お待ちなさい、最後まで話を——」

アイリス 「じゃあな！」

語り 「・・・行っちゃった。」

さて、泥棒の事はさておいて、あなたのお話を是非とも皆様に語ってくださいませ、聖女様」

アイリス 転じて、マリーとなる。

マリー 「私は、花になります。

この街の為に、シアワセの花になるのです。

街のそこかしこに咲いている花は、街の人たちを幸せにしてくれます。聖女は街によって選ばれます。街は人々の中から、新しい聖女を選びます。そうして選ばれた者は、自らの命を捧げ、この街の花に命を与え続け、命が尽きる最後の時に、一輪の花に姿を変え、この街の花の一つとなる。先代の聖女もその前も、その前も。

死んで花となり、この街の幸せの一つとなるのです。そして、新たな聖女が選ばれ街の花に自らの命を注ぐ。

それが聖女の務め。街に与えられた使命。この街の幸せを守れと、その一部となれと街が告げたのです。そしてその使命そのものが私のシアワセなのです」

語り 「(拍手) 素晴らしい。素晴らしいことです。聖女様、あなたの存在によって、この街は常にシアワセに満たされております。皆、あなたに感謝しながら生きるこ
とが出来るのです」

マリー 「でも、もうすぐ私の命も終わりを迎えます。
ほら・・・」

マリー、腕を上げると花びらがこぼれる。

マリー 「私ももうすぐ花となる」

語り 「怖いですか？」

マリー 「(何かをこらえるように)・・・いいえ、そんなことはありません。この街の為にこれまで生きてきたのです。命の在り方が変わるだけのこと。私は一輪の花として、この街で生き続けるのです。それはとてもシアワセなこと」

唐突に、アイリス。

アイリス 「気持ちわり」

語り 「ちよいと泥棒さん、ここは聖女様のお部屋です。勝手に入ってもらっては困りますな」

アイリス 「この人が聖女様？ (マリーの顔をまじまじと見て) へえ・・・。
嘘くさいよ、あんた」

語り 「それはあなたが本当のシアワセというものを知らないからです。

いいですか、本当の幸せというものは——」

アイリス 「うるさいな。私はあんたと話してるんじゃないくて、聖女様と話をしてるんだ。

なあ、聖女様、あんたはホントに幸せなのかい？ あんたはもうすぐ死んじまうらしいじゃないか。誰かの幸せの為にただ生きて死んじまうなんて、あんたの言う幸せってのが、私にはどうにも信じられないんだ」

マリー 「・・・では、あなたが思う幸せとはどういうものなんですか？」

アイリス 「(大げさに) 自由さ！ この世は広くて大きいんだ！ いろんな街があって、いろんな連中が生きている。そんな世界を渡り歩いて生きていることが心底面白いし、幸せだって感じるね、私は」

語り 「いけませんよ、聖女様、その泥棒はただ自分の楽しみだけに盗み働いたの悪党なんですから」

アイリス 「悪党じゃねえって言っただろうが！

確かに、自分の楽しみの為に盗みを働いたのは事実さ、でもな、それは自分の力を確かめるためだ。自分はどんな力を持っていて、どんな風に使えるのか、それを確かめるための方法がたまたま盗みだったってだけだ。

まあ、人の悔しがつてる様を見るのも、嫌いじゃねえけどな」

語り 「ほら見なさい、こんな輩に関われば、不幸になってしまいます！」

アイリス 「そんなことわかんねえだろ？ まだ関わってないんだから。ただ私は私の話をしているだけだ。カッコいい言い方するなら、そうだなあ、幸せの価値観ってやつ？ で、どうよ？ 聖女様・・・ってのは役割か？ あんたの名前を教えてよ」

マリー 「マリー。私の名前はマリーと言います。聖女に選ばれる前の名前です」

アイリス 「オッケー、マリー。私は私の幸せの話をしたんだ、今度はマリーの話を聞かせてくれよ。」

マリーの幸せはなんなんだい？」

語り 「そんなことは決まっています！ それは——」

アイリス 「あんたは黙ってろって言うてんの！」

アイリス、語りを吹っ飛ばす。

アイリス 「はい、どうぞ、マリー様、あんたの幸せ、教えてくれよ」

マリー 「私の幸せは、この街の人たちの為に、シアワセの花になること」

アイリス 「それはあんたの聖女としての役目の話だろ？ しかも、それは街に選ばれた役目だ。そうじゃなくて、あんたが本当にしたかったことの話を聞かせてくれよ」

マリー 「そんなものではありません。私は私が聖女に選ばれたときから、私の幸せなんて捨てたのです」

アイリス 「頭が固いよ、マリー。いいかい？ あんたのやり方じゃ、この街の連中は本当の意味で幸せにはなれない」

マリー 「それはあなたの見方次第でしょう。あなたの見方を押し付けないで」

アイリス「押し付けちゃいけないさ。ただ、街の連中をシアワセにできるのに、その代わりに、聖女であるあんたが死ななきゃいけないってのが気に入らないんだよ。」

なあ、大勢のシアワセの為に一人が不幸になるなんて、間違ってる。あんた死ぬのが怖くないのかい？ 自分の求める幸せがどんなものなのかわからずに死ぬことが、怖いと思ったことはないのかい？」

マリー「・・・」

マリー、窓際に立ち、街の様子を見る。

マリー「・・・怖いわよ。けど、どうしようもないじゃない。私はこの街で生まれて、この街の笑顔を見て育った。物心つく前に先代の聖女が花となり、街が私に語り掛けた。」

『お前が街のシアワセだ』と、街は私に告げた。それから私は毎日毎日、街の人たちのシアワセを祈って、命を捧げて、そうしてもうすぐ私も花となって死んでしまう。

生まれた時から聖女であると運命づけられているならまだよかった。普通の子じゃないと最初から決まっていたのならまだよかった。

憧れたことがあるのよ。お父さんが読んでくれた物語の主人公、たくさんの街を渡り歩く旅人の物語。見たことがない街、見たことがない景色、そういう知らないところにも自分もいつか行ってみたいと思っていたの。

・・・でも、私はこの街の聖女で、自分の幸せは街の人たちの幸せで、この街は私の故郷で、お母さんもお父さんもいて、街の人たちが幸せに生きていてほしいと心から思っている。私がいなくなってしまうたら、この街は不幸になってしまうの？ 聖女のいなくなった街はどうなるの？ 不幸な街はどんな姿をしているの？ そう考えると恐ろしくてたまらない。

・・・ねえ、泥棒さん、どうしたらいい？ 私は私の幸せが何なのかわからない。私は、どうしたらいい？」

アイリス「決まってるさ」

アイリス、マリーの手を取る。

アイリス「したことのないことを、してみるべきだ」

アイリス、マリーを抱きかかえ、街の人々に叫ぶ。

アイリス「お~~~~い、幸せの花の街！ 今から、この街の聖女様を盗ませてもらうよ！

これからあんたたちはいくらか不幸になると思うけれど、自分たちで幸せになる方法を探してくれよな！」

語り 「お待ちなさい！ なんといいことを！ あなたは人の幸せを何だと思ってるんですか！？」

アイリス「そんなの知るかよ！ 人のことを気にして、自分の幸せが手に入るもんか！！！」

アイリス、去る。

語り 「お待ちなさい！ 聖女様！ マリー様！ 誰か！ 聖女様がさらわれた！ 街の幸せが盗まれた！！！！！」

語り 「そうして、根無し草の泥棒は花の街の聖女様を連れ去ってしまいました。

街の人々は大慌てでした。それは当然です。何しろ、街には聖女様が必要だったからです。しかも、マリー様が連れ去られたというのに、街は新たな聖女様を選ばれなかったのです。困り果てた街の人々は――」

アイリス 「そんな話はあとでいいだろ！ そんなことより私達の話さ！

私とマリーは旅に出た！

マリーと来たら、最初のうちはどこに行ってもおどきヨロキヨロして、まるで子猫みたいでさ。でも、一つ二つと街を訪れるうちにその目はキラキラ光って嬉しそうに輝くようになった！ まるで小さなガキンチョみたいに！」

マリー 「（恥ずかしそうに強く）ちょっと、どちらにしろ、子供じゃありませんか。まあ、いいです。

街の外はとても素晴らしかった。憧れることしか出来なかった世界に私の胸は躍ったのです」

アイリス 「道中、いろんなことがあった」

マリー 「大抵はアイリスが要らぬことに顔を突っ込んだり、手癖の悪さが招くことがほとんどでしたが」

アイリス 「でも、食うに困ったらしうがねえだろ！」

マリー 「それでも、人様のお金で飲み食いしたって美味しくはありません」

アイリス 「つてなことで、私はしたくもない仕事をしなきゃいけなくなったりした。マリーと来たら、祈ることしか知らないくせに、やたらと汗水流して働きたいと言ってきかないんだもんなあ」

マリー 「知らないことを経験するのは面白いことです」

アイリス 「だからって、慣れない仕事でぶっ倒れたのには慌てたよ。ああいうのは勘弁してくれよな」

マリー 「・・・申し訳ありません。何しろ、加減というのがよくわからなくて・・・」

アイリス 「とにかく、面白おかしい毎日だった」

マリー 「ええ、とても楽しい毎日でした。

でもね、アイリス・・・私はやはりあの街が好きなんです」

アイリス 「はあ？ 何を言ってるんだ？ あの街にいたらお前は死んじゃうんだぞ？」

マリー 「いいえ、どの道私は長くないみたいなの」

マリー、腕を上げると、花びらがこぼれる。

マリー 「一度、体が花に変わってしまったら、止まることはないのね。私の命が少しずつ尽

きていくのがわかる。

だから、私はあの街に戻りたい。私は花となって生き続ける。それに、どうせ花になるなら、私は私の故郷に根を下ろしたいの。あの街で過ごす日々はとても恐ろしかった。いつかやって来るこんな日が本当に怖くて堪らなかった。でも、皆の幸せを祈り、願っていたのは本当なの。そしてそれは今でも変わらない。だからお願い、アイリス。私をあの街へ連れて行って・・・」

マリー、倒れる。

アイリス、マリーを抱えて、

アイリス「そう言うとマリーは眠ってしまった。

その顔はなんて言うか、とても幸せそうな顔だった。それこそ、一日中遊んでいたガキが疲れて満足して眠っちまうような、そんな呆れちまうようなほど安らかな顔だった。

そして、次の朝、マリーは一輪の花になっていた」

アイリス、一輪の花を取り出し、胸元に差す。

語り 「旅人がおりました」

アイリス 「私とマリーは花の街に帰ることにした」

語り 「道中、旅人はいくつもの街を訪れました」

アイリス 「マリーと訪れるはずだったいくつもの街」

語り 「豊かな街」

アイリス 「貧しい街」

語り 「平和な街」

アイリス 「争いの絶えない街」

語り 「この世界にはいくつもの街があり一つ一つにそれぞれの幸せの形がありました。

旅人は街を訪れ、人々と話し、こう尋ねます」

アイリス 「あなたの幸せは何だい？」

語り 「お金があること」

アイリス 「家族といること」

語り 「笑顔であること」

アイリス 「故郷で生き、元気に過ごすこと」

語り 「旅人は、幸せを教えてくれた人に一輪の花をプレゼントしました」

アイリス 「この花は幸せの約束。

あなたの幸せがずっと続くという願いがこもっているんだ」

語り 「そう言い残し、旅人は去っていきます。

アイリス 「そして、街からマリーを盗み出してどれほどの時間が経ったのか思い出せないけ

れど、私達は花の街に辿り着いたんだ。そこには――」

語り 「花が、咲いておりました」

アイリス 「街中一面の花が咲いていた」

語り 「聖女様がいなくなった後」

アイリス 「街は聖女を選ばなかった」

語り 「人々は嘆いた」

アイリス 「幸せの無い日々を恐れた」

語り 「何が自分をシアワセにしてくれるのかわからなかった」

アイリス 「しかし、何でも無い日々を生きるうち」

語り 「何でも無い朝を迎えるうち」

アイリス 「街に咲く花々が教えてくれた」

語り 「聖女だった花々が教えてくれた」

アイリス 「幸せは選ぶことが出来るということ」

語り 「待つのではなく、自ら手に入れることが出来るということ」

アイリス「だから、街の連中は花を育てた」

語り「それが彼らの選んだ幸せだった」

アイリス「いつかマリーが戻った時に、街が不幸ではないと示すために、たくさんの花を育てた」

語り「この街はもう誰かの命を犠牲にしないで幸せだと示すために、たくさんの花を植えた」

アイリス、胸元の花を手取る。

そして、一つの植木鉢に花を植え、祈る。

語り「根無し草の泥棒は祈りました。

聖女様に、街の人々に。

そして、あなたに」

アイリス「あんたの選んだシアワセが、訪れますようにと」